常山紀談

十一

函番號 ヒ1 號
種別 圖
番號 32,23 號
購入 月 日

919.5
338
Vol.11

備前藩 湯浅先生編輯

常山紀談

書肆 千鍾房 宋榮堂 製本

滋賀県立図書館 甲賀郡文庫

常山紀談卷之十一目次

一 竹中重治心掛の事
一 岑澤某謙信を撃んと云事
一 久世三四郎坂部三十郎物見の事
一 野口彦助扣の事
一 石谷定清御供よ叅る事
一 坪内玄蕃心得の事
一 道化清十郎平野與兵衛よ對面の事
一 谷太郎左衛門物前心得の事
一 可児才藏が事
一 石田三成が事

一 関白秀次公住害の事 附 吉田修理が事
一 木村常陸介最後の事
一 秀吉有岡城へ使者ゑ行きて事 附 河原林越後山脇源大夫が事
一 成田助九郎誅せらるゝ事
一 秀吉公連歌の事
一 三木牛之介鍬形の詩哥の事
一 谷大膳武男討死の事
一 戸川肥後守秀吉公を賀ふ事
一 黒田如水先見の事
一 秀康卿伏見にて妓女國が舞を見給ひし事
一 直江兼續が事
一 石田三成直江兼續密謀の事
一 兼續惺窩先生ゑ逢ひし事
一 石田が黨 東照宮を謀奉らんとせし事
一 細川忠興忠告の事

常山紀談巻之十一

備前國　湯淺新兵衛元禎輯録

○竹中重治曰分不過くる價を以て馬を購ふべからず其馬不乗る時能き敵と見うけ追詰て飛下んと思ふ欲或ハ又鎗を合ぜんと下り立時馬副の人れ續らざれバ此馬人のあふ物なべ一又かゝる馬ハ得がたくと思ふ心出く期を延さるゆゑ此能馬ゆゑふ却て名を失ふ事もあるべし かゝる士ハ金十兩ゆく馬を購んとすゝふ五兩あく求むべしをしげなく飛乃り乗放ちく能き馬ハ捨ゆゑ屋敷さて五兩の金ゆく又馬を求むべし馬ゆかゞるべし此心得有べきなり身をも義ゆゑ捨るべし財寶をや惜ま思ふ心掛常ゆゑべきこと士の本意なるべし

北條家の旗を預かり諏訪部といふ者度々功名あり何まこのは
の軍ふや勝田八左衛門といふ者と二人物見ゑ出る敵不意ふ出く
ぬけ合ひ二騎引取るゐ諏訪部八馬を頂るゐ勝まつる馬ゑ
乗さる故乗切く池帰る勝田八後まつるゐ敵追詰くまゝ下立
く相戦ふ味方助来まゝ勝田打伏らまゝ頭半切まつり敵引取
さるふ勝田助かりゝと思ふ勝田手ふく頭を持上げいまく死せ
げるふ人々八奔て帰さやといふを聞く助けく帰アるゝ勝田も
度々の功名おり後松平右衛門大夫ふ仕へ多い竹中が論ゑ士
さる者の知べき処なり弓箭取身八朝夕ゑ軍旅の事を論ぜん
事あるまゝき事なり中ゝ必天の冥加ふ尽べきなり戦
國ふ生まれ人八其事ゑ臨て功まく禄を得るふてこそあれ

今泰平の時ふ生まれ父祖の蔭ふく禄を世々ゑするハ天より
士れ職を命ぜられまゝ天より命ぜられる其任を忘
まゝんゑハ天の冥加ふ盡ん事必定なり又天下ゑ四民れ上
ふあるく下ゑ鎮る職なりにぜんハ口惜らべき事ふなり

○諏信の許ゑ岑澤何某といふ士罪有て放逐せらまつる越中の
椎名ふ奉公諏信越中へ師を出さまゝ時彼士業ゑかくれ
鉄炮を持く伺ひ居まつりしが俄ふ鉄炮を傍ゑ投捨て泣居さ
アる諏信見出していふふ岑澤めゝゝといされしふ恐られ
仁君智将を討奉らんと存ぜ事悔しく成て今遥ふ見ゑ
アるく先ふ屋形の心ゑ背た又かゝる設けを工ゝ度此上もな
き大罪まてんとうく首を刎らるべしといひく伏れバ

謙信打笑ひ吾は智仁とハ相應せざる虚名なり疾池帰りて
椎名かよく仕へよいたまつぶるかの士越後に帰りて農夫と
朱くこ生を終るとやら

○東照宮何まの時ハ軍よりや久世三四郎宣廣坂部三十郎廣勝
二人を物見に出しなるに坂部ハ勇める色あり久世ハ氣色甚悪
うるそうしば側より笑ふ人のなるふ　東照宮坂部ハ矢性
の剛ハ出るなり久世ぶ及ぶべきにあらざるまでも久世ハ人
為て生甲斐なしとそひ定めるる者と其故に務てなぐむゆ色
心を労して其そ顕まてゐゆ今見よ久世ハ坂部よりも敵
近く進み行く見て帰らむ抱と仰々る処に二人帰りて
ぶ呆して御詞のめくなるを　東照宮坂部ハ生得ハ勇を
頼るるく懈あり久世ハ勵むをもて味ひ深しと感ぜさせるひを

○明智光秀ぶ士野を口彦助山中鹿之介ふ多きく功名せん事
を問席之介物まんハ必目の明ぬものと能ハ得らまてといふ
彦助させる事ともなるそば其後何まて戦ふや川除ふ聘る口
打出るる処に朝霧出るるびまて物色見え分ぬ時ふ山中ぶ教へ
しるを見ひ出しを綱をいろん爰ふく目ぶえぬといひしを
吾後まるるるんと目をふさぶ心を鎮めく目をひらるる
小川の半ふ物具ハ出る武者大差物を指く只一騎渡て来る
をれ行ぶ心もさハやうに目も明ふ成るまぶ押並べく引組で
おち首を取出るり後ふ彦助ぶも我真実の功名ふはあらじ
彼敵大ざるあふ身の疲まるく輙く我ふ組敷まるるるたらん彼

敵も物前より目ろんんざりつらんと語りき

○石谷十蔵定清ハ先祖ハ遠江石谷村の人なり大坂御出陣の時江戸に残さるゝ御跡より従者一人より具足箱を負ひ賀せ自ら鎗を荷ひく潛ま江戸を出駿府まく追付奉つらるゝ兼て心易こうし御近習の人ゝたより江戸小残さるゝ口惜く存重ね御法を破りて参りぬ首を刎らるゝ事ハ覚悟ちゝる事ハのまつハいふ御咎蒙らんとも露だうも悔なるハ此儀と申上てのゝりいへとゝいひしゝバ 将軍ハ殊ゝ法制を嚴ふ思召のふなるゝ爭ゝ申ゝ御首あらん ハ御あゝめうゝ引つゝきて追々ふ来るべくまゝバ必烈しゝ刑ふ行なるゝ人さるゝゝも捨置へゝ事なゝゝまゝバかゝゝ申さるゝ

台徳院殿黙しておりゝゝに十蔵ハ既ゝ覚悟聞えたる上ハ今夜ゝ明朝ハ首を刎らるゝと相待居ゝりしふ十蔵ゝべと て召まゝゝり思ひ極めく進を出まゝバ めはして法を破りゝる やふゝ犯奴共切て棄ゝやと思へども若犯者ゝまゝバ ゝと仰出さるゝて黄金二枚賜ゝりさて江戸へハ重罪ゝて誰人 おとゝまゝ一人も忍びく御供ゝ参ゝゝバ重罪ゝゝべしと固 く仰出さるゝゝなり

○石谷十蔵定清坪内玄蕃ゝ向て度々その功名世ゝ言ゝあ ゝ心掛ゝ功名を遂べき道ゝあゝバ教へらるゝとゝふ坪内 く能ゝて問ゝれ人々事ゝ臨て神の力を教ゝ八幡ゝと ゝふ我も又頼ゝてハ相ゝふなゝて成就せゝゝふゝ

我ハ毎も八幡といふ弗を刺通さんと一筋よりひて後まを取
ざうしといひくるまとぞ

○道化清十郎ハ美濃の人ゆゑく信長ゆ仕へく度々武功勝まる
るゆゑ信長清十郎が指物ゆ無双道化といふ四字を書て與へ
らるまつるゆば世の人無双道化といへり平野渋右衛門ハ齋藤家
の士なるゆ是も武功誉まとるく信長ゆを招るまつる時人く
往て手柄ゆ對面もてるゆ道化も打連て物語せつゝ道化いとく
佞者ハかるゆ先立引ゆ殿ゆ聞其趣を委しく語て教へられ
よくいへば平野更ゆ心急あゆもいハゞ齋藤家ゆ冥加ゆ叶ふ
士ハ皆々付死しつ吾生残ゆく重ての軍ゆハ必死とひつまを
武勇の不足ゆゑゆ死を道まと今日の向ゆあひ恥の上ゆ恥ゆあひ
ひと答へるまバ只今の答至極の理まてゝ先ゞ後殿ハ必死
を不志してハ成ゞるまと大ゆ誉て感ずるゆを

○谷太郎右衛門ハ武功の士ゆく黒田家ゆ客の會釈ゆく招き亟
まとるゆ谷が曰軍ゆ場ゆく先敵ゆ味方ゆ氣を付べし
一人先ゆ進出踏るまゆ処ゆ路ゆ二人三人行重るまバ始知る
者を強と志るべし其処へ切べるまゆ吾ハ又別の所ゆ独踏出
てこゝ居るべき志せゆ志ばるまくすまバ又其処へ味方つゞく
ぞうゝ又日比心安き人のゆとゞ主君ゆ寵愛せらるまとも車場
ゆて其人のかゝるゆ寄べるまゆ必獨立の心得まるべし又士は
弓鉄炮ゆ上手といるまる事好むまるゆあるゆ敵を打立るまゆ
う或ハ城へ射込るまる事のあるまゆ足軽ハ進るまる足あゆ人を

して命のいろん時射あてぎまバ面目なく危き場ハ敵も堅くなるなふ多くハ犬死する事なりといへり

○可児才藏吉長ハ尾州可児山の人なりく大剛ハ者なり上篠を指物のうしろ首をゐて篠の葉ふを口中ふ押込投棄て後の證とゝ

なるなり世の人篠ハ才藏といひ傳ふ關白秀次ゟ仕へ長久ゐれ軍ふ秀次引退まゝふ岡本加介村善右衛門等踏とゞまりく支へしふ才藏が来るをゟ見くく山ふ倚かゝる心地をしこなりまて才ゐ殿ハ何方ふでと問く其退まゝる方ゟ行ゟり目前の敵を見捨てゝ退くハ聞しふも似ぬ才藏なりと論じるゟ或日聚樂ふく語を出して才藏ふいゝるゝ所存ゝやと問才藏ゟて何心なく殿の跡を慕ひゝるだりゝき今人々その論を聞ゟ

右なりさゝバ暇申ゝて宿へも歸らゞ直ゟ立去ゟり後ふ福嶋正則招て七百五十石の禄を與へゝる才藏が下人ふ久右衛門と

いふ剛の者あり才藏其禄の半分を與へ竹内久右衛門といふ

○石田治部少輔三成ハ近江國石田村の百姓佐五右衛門といふ者の子ふくいとけなゝ時ゟ佐吉といひゝ家貧しく近きゝりの寺ふやりく在りゝ或時秀吉彼まゝ行ゟ佐吉が明敏なゝるを呼出して側ゟ仕へゝが頻ゟ禄を増し水口四万石與へらまゝる後三成ゟ人數を招きくゝんと問まゝふ鴻左近一人呼出ゝれとゝ秀吉ゝまハ世ふ学問者く汝が許ふ小禄ふていとで奉公さべきといゝゝバ三成禄の半分をゝ七二万

石典へれと答ふ秀吉聞て君臣の禄相同といふ事なりしよを
ゆゑ傳へぶでいるまぶゆゑ其志なるべでハよも汝ハは仕へじゆ
しくも討ひるるれと深く感ぜるまし鳩を呼出してまづら
羽織を與へく是より三成ハ能く心を合せよといるまぶりの三
成佐和山を賜ひるる時島ハ禄増賞ふべきよ〜いひるまでも
禄更ふ不足ゆもれいぶ他の人々ふ賜ぶりりへと辞しるり左
近ぶ父のと室町将軍家ふ仕へ江州高宮の傍ふかひるるきゆ
ゆゑ隠まる居るりしを三成招き出しるの
○秀吉秀次を寵ひく関白を譲り夫より太閤しるり文禄二年
秀頼誕生ありり秀次よりるぬ事どもさぶく有るまぶ文禄
四年七月八日三成太閤の前ハ出く関白の謀叛既ふあるる

しるて證を正しるる書を見せるを太閤怒て宮部善祥坊
堀尾吉晴木ハ下れして疾伏見ふ来らるる一先高野ハ退
き申ひるるあるる二ッの中よと云送らまるるば秀次畏ア兼り
りして其後栗野木工頭秀乃用白江備後守成定熊谷大膳亮
直澄三人ハ此事いるぶ有べきと問ふ白江頭もあへぶ殿
下只今聚楽を出るりん事然るべるぶ此三人の中一人伏
見へ参りく犯さぬ罪を申開くべしかるりで討手来らば防矢
射く思召定めらまん外他あるんやと申ぶ熊谷此謀左さ
る事なるまぶ帝都の騒ぎとなるん事其恐なるあり
ぶまるる謀叛人といるまん也口惜るべし父子の礼儀なれば
都を出るく東坂本ハ趣き讒者を糺さまん事をヤぶし

法詩さんなくバ唐崎濱ゟ打出く勝負を決すゝの外道なり
ゝで申ゝる栗野只今危きゝ逼て宥を請ゝも聞入らまで
迚も道まゝぬ所なまゝバ今夜伏見ゟ押寄ゝく屍を城ゟ出ゝ
ゝ婦人の縊まて死るゞ如くなゝんハ口惜き事なりとて
ゝれども秀次ゝれ用ざゝて高野山に趣きゝるゞ
一説ゝ吉田修理此時ゝるハ謀叛真実ゝおゝゝまゝバ
人數一万我ゝ負ゝまゝ今夜伏見ゟ夜討ゝて只一時ゟ城
を奪ゝ破ゝ心ゝといひゝれども聞入ざゝゝ修理後ゟ
越前秀康卿ゟ仕へ大坂陣ゟ忠直の供ゝく先陣ゝゝ
五月吾天王寺口の御先手加賀利常ゟ命ぜゝれゝゝば
忠直甚念ゝゝ時本多伊豆守然らバ明日ゟ先ゝけて

加賀の軍兵を踏越えおゝゝ修理ゟ軍せんかゝる事ハ吉田
修理ゟく決断ゝゝる者ゝゝれとて修理ゟ
夜も短くゝ早支度ゝて打立べし人々續ゝまてゝ言捨く
已ゞ陣所ゟ帰ゝゝ否やひゝゝゝ物具ゝ先ゞけゝて加賀の
軍兵の押ゞ所ゟ修理馬を乗寄せ今度の命ゟハ岡山表々
加賀天王寺表ハ越前の三河守先陣を策ゝ各ハ合ゝぶる
やと云もいなゝ真一文字ゟ押破ゝかけ抜ゝまバ越前の軍
兵おゝつゞく修理ハ今日必死と思ひ定めゝまてゝ本多忠朝
の陣ゝり鉄炮を打かゝるゝひゝく死やゝゝと聲々ゟ呼
ゝり真田ゞ陣を切崩ゝ北る敵を追ゝけ天満川の深ゝゝ
馬を乗入ゝ溺死ゝゝるゝゝ我

青巖寺ゟ自害ありかの三人も所そゆて自害せり是三成
太閤の没後世をくつがへしべき考へより先関白を失ひ
ふべく人申ける
○関白秀次高野の青巖寺ゟ自害ありけるまゝ事を司る竜愛
せしまゝ一人くゝ召ゟ諸せられ自害しける中ゟ木村常陸介
師春検使の松田勝右衛門に向ひ今度関白聚樂を出く伏見
ゟ趣くせられんと定めらるまゝ時師春申ぬゝ太閤御對面ゞ
ゆゑ一ゟさんゟハ讒者のなゞ明らかに成りんさまでも夫まで
あく中途より遠國へ放流せられまゝゟかひなく侍を白刃
ゟ伏せられん必此二ツの間なるべしあはれ太閤の使者を斬て捨
諸将の妻子聚樂ゟ召を人質ゟ取罪なき事を申開せゟ

ゞ一さもなくんゟハ和睦も堅く定まり又戦ゟと勇名を遂
べ一空一く聚樂を出させゟ格や有べきと再三諫められど
も吾太閤ゟ敵なる心なくして兼引ハざりに然まバ関白ゟ於
て異心ゟ一ゟ明らかなり此旨を達して後ゟ為ハ其
恩黄泉の下ゟと忘るべくゞと云盃なるを松田折を得く
秀吉ゟ申されバ太閤木村ゞ志を愍く妻子ゟ米百石を與へく
京都誓願寺の近所ゟ住居せしそ
○秀吉信長の使者として荒木村重ゞ有岡の城ゟ来る村重ゞ
士河原林越後守治冬ゞ様めゞつらたまひ遂ゟハあさをなん
ゞ一今刺殺ん事易かんと村重ゟさゝやにてまゞ村重聞
入ゞ此事を秀吉ゟ語ゞまバ秀吉治冬を呼出して懇ゟ詞

をかけさせ給ふる脇指を拔く引出物ゝぞ出らるる村重指替のなくてといへど秀吉吾刀一ツを賴まて信長ゝ奉公する者ゝ非ずといそれより後秀吉世を平げて治冬を深く惡ミ ちゞ出して殺さるるゝ治冬君の為ゝ其仇を除くハ武士の常れ事なり秀吉奮き怨を忘まゝ無道ありしいひく死しゝるる

秀吉河原林ゝ與へらまして脇指ハ三條吉廣ゞ作あり河原林ゞ奮友山脇源大夫重信ゝ傳へゝり山脇ハ摂州の人幼ゝ

より勇名のゝるあり甲州ゝ往て内藤修理ゞ許ゝ其後摂州ゝ帰て荒木摂津守村重ゝ仕へ頻ゝ用ひらまして長臣ゝり村重神田伊賀守と軍の時神田ゞ軍奉行郡兵大夫

八勝まして剛の者なるを毛付して討取ゝり元首数九十八取て首供養三度せしゝるる荒木亡て重信中川清秀ゝ許ゝ隱まし居ゝり清秀の妻八重信ゞをゝ前田利家柴田勝家丹羽長秀一万石をもて招ゝまして引籠ゝるゝり しゝを護國公池田信輝公 懇ゝ招ゝせるひしゝバ来仕へ山崎合戦ゝ明智ゞ士大将丹波國ゝくゝ城を預て居ゝる村上源之丞と馬上ゝくゝ鎗を合ゝ山脇ゞ鎗八十文字ゝて村上ゝ馬の額ゝ疵付るゝ死ゝバ源之丞馬ゝり落ゝるを從者加け来て助るゝと源大夫詞をかけ村上と引組ゝる所を味方数多ゝ打合て村上ゞ首を得ゝり其後も功名有て士三十騎の將

○秀吉北國ニ赴きし時丹羽長重の小松の城ニ立寄られし長重の士成田助九郎といふ者ありて秀吉先殿を北陸道の管領ニせんと志津が嶽の約束ありつるが加賀二郡越前若狭を賜らぬ先殿過去られて後小松十二万石ニ減じ既ニ滅亡ニ近しともいふべし秀吉の不義憎むべし餘りある臣ニ討手仰付らるゝよ輙く刺殺侍べしといひまでも長重聞入ずしてさて止ぬるを秀吉いかにして洩きこしめしけん大ニ怒りて成田を憎む事甚しかりけれバ成田小松を退て伊勢の朝熊山ニ隠れたりしを終ニ捜出して殺されける成田が子半左衛門長重ニ仕へて小松の軍ニ戦功あり

○秀吉或時紹巴ニ向ひ吾發句せん汝脇句せよとて奥山ニもみぢふみわけなく蛍とせられし時

志かとも見えぬ燈火のかげ　脇紹巴の句なり

紹巴蛍ハ鳴虫ニハあらじと申せバ秀吉聞て蛍ニ聲なくとも吾鳴せんとせバ鳴さしてや有べきといはれし時細川幽斎かたへより

武蔵野や志のをつかねてふる雨ニ蛍よりほかなく虫もなし

とよめる哥の有といひたりけれバ秀吉悦ばれしとぞ

此歌ハ蛍の声ありといふ心ニハあらず雨降る夜ハ皆虫の鳴止むものなれバ光の見ゆる蛍より外虫なしといふ事なり

○三木牛之介ハ畠山高政ニ仕へて剛の者なり五尺ばかりの鍬形打たる冑を着て運在天見敵無退又ハ人を只怯しめぬことをよかりなれ軍ニ出るもさんがけをせバとよめる哥を鍬形ニ書せしが天文十一年正月河内の合戦ニ一番鎗を合せ敵の大将を

討取り天文十六年七月廿三日三好政勝入道宗三と舎利寺の軍小討死しける後此哥の事を秀吉小物語する人ありしかば秀吉歌の趣意よろしからんに吾なら人八出でさるこ

○抜くよりかりくるまの軍の時も先ゞ此をしてとよむべき物をといまさりけり

○天正六年秀吉播州三木の別所長治を撃つ時谷大膳八濱手の大将なり兼て大膳八寄騎小と秀吉望まれしかども信長許さざるに依て初めしかしこ免らる大膳敵三騎と馬上にて鎗を合せ皆討ゝ秀吉疾かさの丸出丸の名と攻らまてよとゝへ八大膳城堅固にして容易に攻ゝ難しと答ふ秀吉日頃勇名を紀大膳小城一ツ破ゝるゝやと詞をかけらまゝれば大膳も怒て

秀吉も既に刀の柄に手を懸べゝ色なかりしかば竹中半兵衛立ふさぐり戦場の勝負ゝて力を尽すべきこゝの事ぞと

いつ迄に蜂須賀彦右衛門も来ゝて秀吉の轡を取て押返し夜に入て秀吉酒肴を持せ大膳が陣屋に到りふの武功抜群なり先の問答八我過ゆく後悔大方なりとて懇情甚し其後大膳手勢を率てかはの丸へ攻かゝる城中もこゝを大事と防ぎ矢石を打出せども大膳小しもひるまず士五十騎歩卒二百計一の城戸口を押破ゝ多数の死人数を打ゝ寄手押たゞけば大膳念なく無破ゝ数ケ所を負て蹈居ゝ所に法師武者猩々皮の羽織着ゝ引返して大膳に向ふ大膳吾疲ゝ近寄て首を乞て

高名よせよといふを聞きて走り寄りて一太刀打つ大膳敵の草摺を取りて引きせ脇指を抽て刺貫く処に別所ゞ士大将由井小兵衛と名乗りて引返して逃来て大膳を一太刀斬りて

る処へ大膳ゞ嫡子出羽守十七歳なるゞ走寄りて生きみうけて由井を打て芝居に打ちて押へて首を取る父に向へバ大膳も息絶えて出羽ハ父の死骸を陣屋に入て取出る首を秀吉の実検に備ふ秀吉大膳ゞ討死ゆゑ由を聞て せめて死骸に なりとも對面せんとて陣屋に引据き人を討ぜるよりて涙ふむをぞ[illegible]

秀吉家譜に載るゝハ大に異なれ然れども此一条ハ谷の家に傳へ来る説なる由なれバ家譜ハ誤なるべし

大膳ハ江州犬上郡の人信長に仕へて川尻肥後守稲葉伊豫守と同じく軍れ評定の人に加へられる十四才より四十七才まで鎗を合する事九度首を取る十七度なり

○浮田秀家伏見にて秀吉を饗し奉る時廊下より行く処の白砂の上に戸川花房を始として並び居て拜謁に秀吉戸川達安に吾をおぼえいまするか戸川秀吉を見まゐらせて書院にて記憶ふ秀吉かゝるふるまひ多うきれバ其より

して古礼家の礼儀も多く失ひ給ふ

○秀吉病重ゆゑ朝鮮渡海の軍兵を引取んと討ち給ふ時朝鮮へハ必徳川殿赴かせ給べし此ゆゑバ日本ハ自ら徳川殿に帰服ぬべしと人をいひ〳〵処に思の外に秀吉石田

三成に命ぜらるまて朝鮮に却きりさて日本の權威は
三成に帰さべしといふを黒田如水擬是を然るべ
○朝鮮の事三成そを兼るふより日本ハ徳川殿の掌れ中に
あらと賞る三成是より伐て人是を嫉こなん然ハ徳川
殿の仁徳に靡き従ひて日本ハ自然と徳川殿に帰服せん
といふましが果して然りき
○越前の秀康卿伏見に國といふ妓女を召て舞せしまし
時標に掛たる水晶の珠数見苦しとて物具の上に掛
げるふ珊瑚の珠数を賜るるがさらに舞ける時頻に涙を
流しぬふ人を怪しみられハ秀康卿今天下に幾千万の女あ
またれも天下一の女と世に誉らまと名高ハ此女なり吾天下

第一の男と世にいふまたあの女さへ男に果さるとなるへ
泣まるると仰有るを
○越後の士大将直江山城守兼續ハ朝日將軍義仲の乳子樋口
次郎兼光が末孫なり謙信に仕へ景勝に至る景勝奥州
にて百万石を賜ふ時米沢三十万石を直江に與へらまし倍臣
の中第一の大禄なり長高く容儀骨がら双なく辯舌明らか
に殊更大膽なる人なり且文藝ふも暗らしぶ五臣注の文選
八此人板行させるとなり詩をも作て
春雁似吾吾似雁洛陽城裏背花帰
などいふ句を世に聞
えなり伏見の城にて諸大名幾等も並居る中に伊達政
宗懐中より金銭取出して人に見せらまるに其頃金銭

の始めて比ゝく珍しくてありたりやさる直江が未座に有し
をさいまこれ〳〵まことに時直江扇の上に金錢を置て折紙し
女童のもてはやすかゝて親しらば政宗いや苦うもれに手
よ見まてよと云も終らぬに直江謙信の時より先陳の下知して
麾取れまふかゝる賤しき扇に載てはとく
政宗のかゝるに投戻しかへ兼續父も山城守といふをやを僧なり
しが還俗して武勇を事とするやと
○石田三成と兩度の合戦ぐ成しが直江を近付私語るに卑
賤より出て天下を治る八大丈夫の志なり我豊臣家の恩澤し
太閤斯世をおはしまさん中は思ひ立べらしさまでは終に八
旗を揚天下をとるべやと存るなり其時徳川家父子をば如
何して討亡ぼさ武畧を巡らしまやと語るに直江此
を幸とやおもひいらん是こそ志を所に入ぬまでも徳川父子
関八州を領して且蒲生氏郷といふ勇将に親しきあり輙く勝
べらしば先氏郷を滅し景勝に會津を賜ふたんや然らば
吾景勝に謀ふく旗を揚我先陣して師をぞ出べし其時西
國の諸将こちをかゝひ押寄て関東を討亡ぼすと
おもし相謀ふ終に氏郷を毒害し後秀行八十万石の地を
削ふく會津を景勝に秀吉賜ふらるに此謀より事起るといへ
○直江兼續惺窩藤敏夫に面せんといへども関入らるに兼
續行て行きるまバ不在あり度を招けども行さるに今日来り
るを逢ば偽て他に出るとやいはんとて直江が許に行

小直江其日関東ゟ赴きしゝ跡を追て大津ゟ到て対面いろ〻直江慶まゝゝる家を急ゟ取立る時人臣の心得ハいろゝ
向惺窩事を速ゟせんとをゞ却て敗るゝ基なりとぞ答へる
後ゟ直江景勝ゟ進めゝく旗を揚させ必家を滅さゞるべゝと惺窩
いろ〻しが果ゝて景勝ゟ事を起させゝるゞ其功なゝざるき
○慶長三年八月十八日太閤逝去其比　台徳院殿伏見ゟおじ
まゝして太閤の病重ゝるゝゝば関東ゟ赴くせゝるゝ事延引な
ゝゝゞ俄ゟ十九日伏見を發ゝて関東ゟ帰らせゝるゝ是
東照宮遠大の神慮なるべゝ四老奉行内々相討て徳川殿伏
見ゟ有て権威日〻ゟ増長さるべゝ秀頼公を早く大坂へ移ゝ
諸方一同ゟ糸集りゝく尊敬さるべき事然るべゝゝ　東照宮

強て申て同四年正月十日大坂ゟ移居ゝゝ　東照宮も送ら
せゝるゝひゝく大坂へ御出ありゝ片桐東市正且元ゞ宅ゟ御止宿あり
ゝるゞ十二日のゝけなゝゟ俄ゟ打立ゝるひゝく淀川を御船ゟて上
らせゝるゝゝゟ枚方近く川岸ゟ人多く群集ゝゝり若や謀奉る
叛反の者ゟ有べしゝと聞ゝく処ゟ井伊直政ゞ足軽どもゝ
中者ゟり程なく御船近く成ゝるゝべ脇五右衛門などいへる物
跪きて待ゝるゝく頻て伏見ゟ入らせゝるひぬ
又此時御乗物ゟハ村越与三右衛ゝを乗させゝるゝ
東照宮ゟハ倍者九騎馬の中ゟ御ゝゝゝゝ有ゝるゝもゝ
ゝゝ又井伊直政ハ馬上ゟゝく御迎ゟ出物具ゝゝて其上ゟ常の
衣服ゝゝゝり直政ゞゝゝ者皆下ゟ具足ゝゝゝ弓鉄炮の者

彼是二千計よりく条殊に御愛ありくる跡へ鹿毛を引来り
くまくば其侭打殺せのひく帰らせのふともいへり
此頃既に世間さはぐくに云ふ〳〵いろゐる事ら出来らんと人々
あやぶみなげへり　東照宮も御屋敷に大竹にて菱垣を結せ
らまと御門を押開き敵寄来らバ堅固に防きちるくせのふべき
設あり御門を開く事然るべう〳〵とゆ云あ事ならバ門を
閉て守らバ敵に侮らくなり只押出まして軍の支度をせよ
と仰有るるとて京極高次参りく大津の城へ引移らせらる
まんやと進めされるを聞召敵なバ上の臺へ押上げ金札の
宮の邊ふく〳〵真先に出く一合戦をべし吾兵二千計やあるん
敵何萬もあまと打破る事かさうべと仰らまるる正月十九日

安國寺瓊長老生駒雅樂頭中村式部少輔堀尾帯刀四人
四老五奉行の使として
東照宮に参りく伊達政宗福嶋
正則蜂須賀至鎮緑組の事によりく徳川家獨擅なる事ど
も豊臣家の爲なるべう〳〵ふる由申旨あり依て世の中愈さ
わぐはあり風説あり其頃榊原式部大輔康政伏見に上るとて
二月九五日尾州宮に居るる伏見の騒ぎ〳〵き由を聞日夜道
を急ぎ〳〵そこにて〳〵みてきけバ伏見にて既に　東照宮の
御館へ敵押寄〳〵りなぐいひふ〳〵さる廿六日の晩膳所にて伏
見よりの飛脚に行逢いそぐ弓箭ハ始まりやさぬとゆふと家
康政悦んで則膳所に陣し秀頼の下知と称し伏見の騒に付
東海東山両道の人留まるとふまさせ勢田矢橋を三日押留

より其比の騒しきより諸國より聞傳へ京伏見より集る人殊外
多かりしか押留らるる草津野洲を始として何万といふ數討る
べうべく扨康政三日の後未刻より構へらる関所をひらかるれば
旅人一同に京伏見より入る康政膳所を立て七千計の人を卒ゐ
て伏見へ入らるべく京より東より數万の軍兵池田ひろ
いのふくさを康政小具足着て鉢巻し馬ぢうし押立てゐられば
御前に召て御ものづかひを下されを康政下知しく
御蔵より料足數千貫出させられ分波し内府の軍兵六萬
よりかけ引さるべく館ゆく兵粮の用意俄に設けらるるといい
ながら店屋物を買来らしむ数千人京伏見淀に馳廻りて赤
飯菓子酒やうの物一つも残らず買来るべく関東より十万の軍
兵集りしと人々思ひぬ者もなし是に依て石田が謀
しくなりしとぞ　東照宮柳生又右衛門石田が士大将嶋左近
と同心のよしふく懇なりと聞召て左近方へ行て扣て
彼ハいかなる人聞て来まて仰有しは柳生左近に逢て世
間の物がたりいふ成べき事なりんといひ来べく左近申て今松永
明智二人の智謀決断ある人なるべく何事ゐみべきとお笑ひ
此子細ハ或時石田密謀に及びるる左近豊臣家の為を存せんか
斯あらで止べきやされども爰に存る旨あり大事を企るハ我志
さる慶を無二無三に決断して小も猶豫有べうべきるふ去年
より度々仕課るべき図を申しくそうしの事多し既に時を
失ひぬ能々世のありさまをかんがるに石田の家を悪む人々大

徳川殿より心を寄せられ當家の存亡計るべき事一日のうちも残
多く只理を非よりげに唯今まで疎遠の諸大将達へも無り
くぶりく遺恨なく射ひて交ひて親しみちぶ〳〵く時を待べきも一ツ
の計策なくてといひやまバ三成さまバ緩令一時の能志を遂
るも後の安らるべき様を計るまうといひくるよ左近のやく
事能く一時の勝を得るたの〳〵バ後の何の危き事ならべき内府の
親しきくを積るよ其兵二万よるべらぶ味方素より心を合
せば大國の人々又近國の兵いを集るとも忽馳寄て五六万ハ
及ぶべし景勝卿再挙を取て下知し関東を攻破らんよ何程の事
ならべきとて又存る旨をいひ出るよ客の来て三成坐を立
ましハ樫原彦右衛門居残りて左近よ向ひいふる仰さる事く

松永弾正明智光秀ハ無双の悪逆の者なれど事を決断する
ハ誰ら相並ふべき此詮議の破り相るよ頼むべきものをといひ
くるくるや其よりくかく柳生よハ答へくるとなく
○石田三成を始め相組せる人々加賀利家を推ずるて　東照
宮を傾けなんと日夜相謀まり利家の長子利長細川越中守
忠興を招きて累年親しくくる間度〳〵さそなる危ふ〳〵へを
扶るらんやと問るふ二代の知音ゆてらへバ聊兼畧ハまじと答へ
らる利長左斯こそ有べきまま頃日石田三成小西等相計つく内府
の向島ハ館を攻圍んと擬決しぬ潜よ知らせんぞと語らまくバ
忠興熟〳〵と考て日比の親しくく斯る大事を告知らせハ事浅ら
ぬ事なり心得ひぬ明日参りく申合ハんとて帰られるぶ

是ハこれより前　東照宮ハ藤森よりおもむくるゝふ井伊直
政が土木俣土佐もゝ風よ高ふして御館の隣なる宅よ火を
かけたんハ危き事なりと申ゝまゝだ　東照宮御寢所へ
土佐を召て具よ閑ゝ召まゝ其翌日向島ようゝゝせるひろを
直よ向島へ為て　東照宮御對面有ゝゝバ忠與近習の人を
屏けて只今為る事別の子細もハゞ石田等黨を結び利家を
依頼とゝて君を亡ゝやべきゝゝ人ハ利長と年頃の親ゝゝ
よりゝく具よ洩兼ぬ彼等が謀よ落ざる御設こて為るべく
ひゝゝゝさまゝゝゝを聞ゝ召過ゝ年信長攝州出陣の比弱年
ゝて武勇の誉ゝ有ゝゝ申通せゝゝゝ斯る深志ゝゝゝゝと
知ざりゝる悔ゝゝよと悦だせるひゝく神原康政を召ていゝく

有へきと仰有り事急なれ後まゝて八人よ制せゝゝるべゝとヤ処ゝ
忠與國の事ゝすけハ人の與さゝるゝ寂ゝゝへバ浅野幸長を召ゝ
れへ彼ハ必徳川家よ心を寄べゝゝゝゝゝゝれバ頼て使を走らせ
ゝゝゝふ取あへ為ゝれゝゝゝゝゝゝゝゝ忠與出向ひゝく事の子細を語ら
ゝゝよ人多き中よかゝる事を知せゝゝゝ事　交のかひ有かゝ為ハ
疑の生ゝ易ゝ習ひよゝゝゝ忠與幸長先誓紙を書てなりぬ
若敵ゝせバ幸長ハ宇治川を固めひゝん忠與ハ敵の中よ新交
ア不意よ一軍仕へゝゝとぞ相計らまゝゝるさまゝゝゝ是も始終
勝を全うゝゝべきゝゝゝもあゝゝゝゝで利家と和平有ルよ踰る事ハほ
只両人よ任せるひゝへゝゝく其翌日忠與風よ利長の許よ行向
ひて昨日の意趣一々内府よ告ゝゝとぞ語らまゝゝる利長色を

変じてこハそも戯よりや実よりやと驚まゝ〻忠典さゝまゝバ愚者も千慮の一得ハ此事を忘さるゝ石田謀で両雄を闘ハしゝん其弊こゝ至ゆんと料こゝのゝ如ん両雄相闘ひゝく亡びゝバ安芸の輝元備前の秀家などを大将ゝゝて吾等が如き者ハもゝゝく攻平げゝん所存見顕しハ寛仁の内府ゝ興ゝてこゝて家をも起さゝ屋ゝゝ二成と心を合せて名を汚ゝ身を失ゝんハ必定ゝゝてハかく申詞を許容ゝひゝゝばゝく内府と今親利家と和睦有て世穏ゝあゝゝん事こゝて然ゝるべゝゝゝゝ是全く前田家を佑ゝる所ゝゝくハと詞を盡ゝゝて、規誨せゝゝまゝゝゝバ利長も深ゝく思慮ゝて道理ゝ當まゝる事どもゝてハさゝゝバ父ゝゝさバやゝて利家ゝ斯と告て利害を詳ゝ語ゝられゝゝゝゝ利家も諾せゝゝゝゝゝゝ

又一説ゝ五老五奉行の内争論不和の事あゝゝバ生駒雅楽頭親正中村式部少輔一氏堀尾帯刀吉晴三人和平を取計ふゝゝゝと兼ゝく太閤の遺言ゝ因ゝく井伊直政ゝ就て和平の事をゝらまゝゝゝゝいゝゝ

常山紀談巻之十一終